

Newsletter

日本在宅ケア学会

2012年11月発行

No.6

日本在宅ケア学会事務センター

〒162-0825

東京都新宿区神楽坂 4-1-1 オザワビル

TEL:03-5206-7431

FAX:03-5206-7757

日本在宅ケア学会 新体制のご紹介

—平成 24～26 年度理事・監事一覧および委員会名簿—

日本在宅ケア学会は、平成 24 年 4 月 1 日より、新体制としてスタートいたしました。現段階でのご報告を含め、理事・監事をご紹介させていただきます。どうぞご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

◆理事長◆



亀井 智子

聖路加看護大学老年看護学

本学会の新体制がスタートして半年が経過いたしました。学会活動の充実期にある今期には、会員の皆さまとともに、いくつかチャレンジしたいと考えております。

まず1点目は、会員、とりわけ若手会員の研究活動を推進する事業です。日本在宅ケア学会の第一の目的は、在宅ケア学に関連する学際性のある、すべての会員の学術的研鑽の場となることです。在宅ケアを受ける利用者のニーズは多様化し、在宅ケアに従事する専門職種やその数も増えました。「共通言語をもつことが難しい」とよく耳にしますが、「研究」という言語は共通です。研究的な結果等の提示によって、どの職種もそこに生じた現象を理解することが可能となります。将来の在宅ケア学を担う若手の会員を対象に、研究活動への助成制度を設け、若いうちに多くの研究経験を積み、学会誌への投稿により会員と議論するプロセスを踏みながら、会員の研究活動を活発にしたいと考えております。

2点目に、生涯教育の推進です。諸制度の改正、社会経済の変化、新たな資格制度の検討など、在宅ケアの実践や研究を取り巻く環境は、刻々と変化します。この変化に対応するうえで知識の up to date は欠かせません。さまざまなトピックスの学習を地元の会員相互の協力によって開催できないか、検討しております。地元での学習や交流の機会があれば、いわゆる「会員コミュニティ」が広がり、「会員力」の向上も期待できます。皆さまからのアイデアもどうぞお寄せください。

◆副理事長◆



加瀬 裕子

早稲田大学人間科学部

私は、大学院の博士課程前期を修了したのちに、高齢者の在宅ケアに携わりました。資産を担保にして、その資金で亡くなるまで面倒をみるという、リバースモーゲージと在宅ケアが組み合わさったような制度です。私は初代ソーシャルワーカーとして、元気な高齢者が寝付いて亡くなるまで、ケアマネジメントを担当しました。それ以来30年以上、ケアマネジメントの研究をしています。7年間の現場実践の後に、国家資格となった社会福祉士養成のため、大学に呼び戻されました。最近の研究の焦点は、科学的根拠に基づいた認知症ケアマネジメントの開発です。

少子・高齢社会は、さらに複雑な様相を呈しています。看護・福祉・医療領域の専門家が、それぞれの専門家集団の内部だけで研鑽を積むだけではなく、その成果を他の専門職や市民と分かち合うことが必要な時代となったのではないのでしょうか。私自身も、本学会にかかわるようになり、異なった専門職から学ぶことが多く、成長の糧となりました。本学会は、現場実践と研究、専門的探究と総合的なアプローチが出会う大切な機会を提供する使命をもっていると思います。本学会の発展のために、微力ながら、力を尽くしたいと考えておりますので、ご支援のほど、お願い申し上げます。

◆理事◆



内田 恵美子
(株)日本在宅ケア教育研究所

看護系役員として、「看護系学会等社会保険連合」とも連携し、訪問看護事業における看護報酬改定や、介護報酬改定についてそれぞれの改定期期に合わせて、改定要望のまとめとエビデンスの作成、厚生労働省とのヒアリングなどを行っています。本年度はすでに、平成 26 年度に行われる医療保険の診療報酬改定に向けて準備に入っております。

本学会は在宅ケア分野における学術振興とともに、現場との融合にも努力している特徴をもった学会です。会員の皆さまの声を反映させてゆきたいと思っておりますので、率直な改定要望をお待ちしております。ぜひお寄せください。



岡田 進一
大阪市立大学生活科学研究科

この度、日本在宅ケア学会の理事を拝命いたしました大阪市立大学大学院の岡田と申します。本学会では、学会誌の編集委員および国際学会活動委員を担当させていただくこととなりました。本学会は、学際的な学会であると同時に、実学的あるいは応用科学的な要素を含んだ魅力的な学会であると感じております。まだまだ未熟であり、さまざまな研鑽を積み重ねなければならない私が理事をお引き受けすることに躊躇を感じましたが、理事の先生方のご推挙で務めさせていただくことになりました。微力ながら、本学会の発展のため、犬馬の労をいとわず、学会発展のため活動させていただきたいと存じます。

さて、この紙面をお借りいたしまして、私の自己紹介をさせていただきたいと存じます。私は、社会福祉学分野でのケアマネジメントを中心に研究を進めております。とくに、認知症ケアおよび終末期ケアにおけるケアマネジメント、ケアマネジメントにおけるスーパービジョンなどについてさまざまな角度から研究しております。ケアマネジメントは、在宅ケアのなかでは重要な位置にあるのではないかと私は感じており、学会でのさまざまな議論を通じて、学際的な観点から学ばせていただきたいと思います。今後ともよろしくお願い申し上げます。



黒田 研二
関西大学人間健康学部

新しい理事長のもとで、理事として政策提言検討委員会、学会活動推進委員会に属しながら学会活動推進にかかわっていくことになりました。ここでは、今後、私が貢献したい本学会での研究分野に触れたいと思います。

これまで私は精神医学と公衆衛生学を専攻し、最近が高齢者福祉を中心に援助レベルの研究から政策の国際比較までを手がけてきました。こうした関心の延長として、現在は認知症の人の地域での支援のあり方や高齢者虐待防止方策といった領域で研究を進めております。認知症の研究はさまざまな学会で取り組まれています。焦眉の課題となっている認知症の人の地域における支援に関する研究は、本学会でさらに重点的に掘り下げる必要があります。とくに医療、看護、介護、福祉サービスなどが連携する地域の仕組みづくり、つまり地域包括ケアシステムの研究は、学際的な学会として本学会が先頭に立って進めるべき課題だと認識しています。

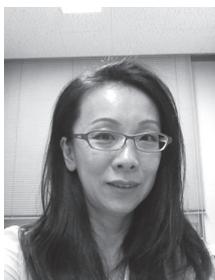
日本はこれまで欧米の高齢者ケアから多くのことを学んできました。認知症ケアについても同様です。今や高齢者ケアは人類共通の課題となりつつあり、日本のみならず、21 世紀の中葉には、韓国や中国でも認知症ケアが大きな社会的課題となるでしょう。国際的な共同研究や情報交換にも力を入れていきたいと考えております。



河野 あゆみ
大阪市立大学大学院看護学研究科

広報委員会を担当している河野あゆみです。今期からは委員長としてのお役目をいただいております。本学会はすでに会員 900 人を超える規模の学会になっておりますが、会員の約 7 割は大学などの教育機関に所属しています。今期の広報委員会では前期に引き続き実践家や教育機関以外に所属する在宅ケア関連の専門家にもアピールできる広報活動に努めていきたいと思っております。また、本学会は発足から 17 年経過しておりますが、この間に情報伝達の方法は、めまぐるしく変わってきています。とくに、ホームページは学会広報において重要な役割を果たすツールになってきています。広報委員会では、時代のニーズに合った情報提供の方法を工夫し、ニュースレターでは会員の皆さまに親しみやすい情報を提供していきたいと思っております。まずは、今回のニュースレターでは理事および監事の紹介という初めての試みを行いました。また、ホームページに掲載する基礎的な情報を充実させ、会員やこれから会員になる方

に使いやすいホームページになることを目指して、現在準備を進めているところです。どうぞぜひともホームページやニュースレターをご活用いただき、また、会員の皆さまには遠慮なくご意見やご感想をお寄せいただければ幸いです。



小西 かおる
大阪大学大学院医学系研究科

本学会では、2006年から査読委員、2009年から評議員、2012年より理事を務めております。今期は理事として日本在宅ケア学会誌編集委員、日本看護系学会協議会の担当をさせていただくことになりました。

厚生労働省では、チーム医療推進会議において、看護師の特定能力の認証に関する検討が行われており、この会議のもとに開催されているチーム医療推進のための看護業務検討ワーキンググループでは、医行為の分類および特定能力の認証に必要な教育等が検討されています。在宅ケアにおいては、医師の指示のもと看護師が単独で訪問し、判断および医療の提供を行うことが多く、本件により訪問看護師の役割拡大につながることは大いに期待されます。一方で、現状として訪問看護師が提供しているケアが実践しにくくなることがないように、慎重に対応していく必要があると考えます。本学会として会員の皆さまの声を反映した意見を提出できるように努力したいと思えます。

私自身は、人工呼吸器装着者等の重度の障害をもつ神経難病の地域ケアシステムの構築を専門として研究および社会的活動を進めております。難病の療養者やご家族の皆さまから「自分らしく生きる」ことについて深く考える機会をいただき、それを支援することをライフワークとしています。「その人らしい生き方の支援」をこれからも続けていきたいと思えます。



佐々木 明子
東京医科歯科大学大学院
保健衛生学研究科

在宅ケアに関連する保健医療福祉制度が変革しています。このような動きのなかで、在宅ケアの利用者のみならず、家族、地域の人々、そして在宅ケアサービス関係者のすべてが満足できる在宅ケアの確立に向けてその思いを共有し、実現できるようにしていく必要があります。

そのためには、介護予防から在宅療養、機能回復、そしてターミナルとその後などすべての段階において、在宅ケアの利用者、家族、ボランティアなどの地域の人々や組織、そして在宅ケアサービス実践者・教育者・研究者がそれぞれのもつ力を最大限に発揮し、共に満足して生活できる地域ケアづくりをさらに推進することが課題となっています。

保健医療福祉領域に関する学際的学会である本学会の特徴を生かしながら関係職者と協働し、これらの課題へ取り組み、在宅ケアの発展と地域社会への貢献に向けて、尽力していきたいと思えます。また、担当する広報委員会の活動においては、在宅ケアに関する実践や研究活動の卓越した成果を国内のみならず、今後は世界に発信していきたいと考えております。



下田 信明
杏林大学保健学部

世界でも例のない少子超高齢社会となったわが国にとって、在宅ケアの充実は大変重要な課題です。在宅ケアの充実には、保健・医療・福祉・介護・教育・行政等の専門職が有機的なチームとなる必要があります。そのシステム作りには、本学会は貢献する必要があります。

私は作業療法士であり、本学会の理事として唯一のリハビリテーション専門職です。その特性を生かし、本学会の発展と、その結果としての有機的な在宅ケアチームのシステム作りには貢献したいと考えております。

私は現在、論文賞選考委員会委員長および学会活動推進委員会・編集委員会・政策提言検討委員会の委員として活動しております。学会活動推進委員会の委員としては、とくに公開講座の運営事務を担当してきました。

今後も4つの委員会活動を中心として、本学会の充実・発展に寄与したいと思えます。皆さまからのご指導をいただければと存じます。よろしくお願いいたします。



白澤 政和
桜美林大学大学院老年学
研究科

本学会の理事長の職を2期6年間務め、今年の3月に退任いたしました。この間、会員の皆さまからの多大なご支援・ご協力をいただいたおかげで、大過なく終えることができました。心から感謝申し上げます。

退任以降、半年以上が経ちましたが、現在は渉外活動推進委員会の委員長を仰せつかっております。この委員会は、企業などの団体からの新会員を増やしていくことが主要な業務です。現在の介護保険や医療保険の厳しい経営状況のもとでは、新しい団体の加入が進んでおりません。会員の皆さまから情報をいただき、団体加入を進めていきたいと思っておりますので、ご協力をお願いいたします。

個人的には、今年は本学会だけでなく、他の学会の会長や副会長の役職も終えることができ、少し自分のために時間をもつことができるようになってきました。そこで、積み残してきた研究に再度着手し、精進しております。この間の成果として、『地域のネットワークづくりの方法（仮題）』（中央法規出版）を書き下ろしで執筆することができました。現在、校正中で、12月末か1月には刊行の運びになる予定です。

以上のような役職からリタイアしていくことは、老後の過程として、一般に「喪失」(deprived)と称されておりますが、そのような思いは微塵も感じません。むしろ、「獲得」(acquired)とまでは至りませんが、新たなキャンパスに再度絵を描いてみようとする心境です。学会の学術集会においても、無心で、じっくりと発表を聴かせていただきたいと思っております。



杉澤 秀博
桜美林大学大学院老年学
研究科

本学会では、学会誌の編集委員を担当しております。私の専門は老年社会学であり、老年社会学とは、高齢者、高齢社会に伴う諸問題を研究対象とし、その現象の説明を社会学の理論や分析モデルを活用しながら行う学問領域であると私なりに理解しております。しかし、老年学は学際的な学問領域であり、社会学的な理論によるのみ解明できるものでなく、医学や心理学など他の領域の分析モデルや枠組みを活用する研究者と共同で研究を行ってこそ、高齢者や高齢社会に伴う問題をより深く理解できるものと考えております。

在宅ケア学も、老年学と共通して、在宅ケアに伴う諸問題を研究対象としており、その問題の総合的な理解と解決策の提案のためには、さまざまな学問領域の理論や分析モデルを用いたアプローチが必要であると考えております。在宅ケア学会誌は、学術誌である以上、研究の手続きがきちんとしていることも重要ですが、それと同時に、医学、心理学、社会学など自分の拠って立つ理論や分析モデルを明確に意識した研究が必要だと思います。そのことによってこそ、学際的な研究の活性化が図られると考えております。このような研究が1つでも多く投稿されることを期待しております。



住居 広士
県立広島大学人間福祉学科

本学会の学会活動推進委員会は、私が委員長、副委員長を黒田研二理事として10名で構成しております。

【国内学会活動推進委員】黒田研二理事、下田信明理事、麻原きよみ評議員、小野ミツ評議員、原礼子評議員

【国際学会活動推進委員】私（住居広士）、加瀬裕子副理事長、岡田進一理事、白澤政和理事、辻彼南雄理事

国内・国際学会活動推進委員会を構成して、本学会の学会活動推進を実施しております。

2012年11月17日（土）に品川ホテルゆうぼうとにて、日本ホームヘルパー協会東京支部とテーマ「訪問看護と訪問介護の連携の架け橋の構築」のもと、公開講座および交流会等を開催し、国内学会活動推進事業を展開してまいります。また、第17回日本在宅ケア学会学術集会第1日目の、2013年3月17日（土）には、テーマを「日本の高齢社会対策と在宅ケアの現状と課題解決に向けて」として、公開講座を開催予定です。

今後、国内外の在宅ケアに関係する学術団体ならびに実務団体との連携と協働等により、学術的交流を図り、本学会の学際的分野の拡大と質的向上を図るとともに、国際的な架け橋の構築と質的向上を図る予定です。



瀧澤 利行
茨城大学教育学部

倫理委員会委員長を引き続き仰せつかった茨城大学の瀧澤です。専門は公衆衛生学です。本委員会では前期までの倫理委員会の業務として、「日本在宅ケア学会倫理綱領」（平成 21 年 3 月 14 日施行）、「日本在宅ケア学会科学者の行動規範」（平成 22 年 1 月 24 日施行）、および「日本在宅ケア学会研究倫理ガイドライン」（平成 23 年 3 月 19 日発効）の 3 件の倫理文書を起草してきました。科学研究団体としては一定の水準の倫理基準を満たしていると感じております。

しかしながら、現実にはいくつかの研究倫理問題が発生しています。端的には二重投稿問題や研究成果の分割発表問題に表れてきております。また、一度で収集したデータを、分析手法を細分化しながら多くの論文に仕立てる（俗称「サラミ出版」）などもあとを絶ちません。業績数を競う昨今の研究事情では容易に陥る倫理的イシューといえます。本委員会では今後も研究倫理ガイドラインの徹底を図るとともに、学術集会でワークショップを開催するなどして、研究倫理の喚起を図ってまいります。

さらに今後の課題として COI (conflict of interest : 利益相反問題) への啓発が求められています。研究社会では独自の COI に配慮する必要があり、倫理委員会でもこの課題について検討会を開き、学会としての対処を考えていきたいと考えております。よろしくご理解のほどお願いいたします。



辻 彼南雄
一般社団法人ライフ
ケアシステム

亀井理事長よりご推薦をいただき理事を拝命いたしました一般社団法人ライフケアシステムの辻彼南雄（つじかなお）です。ライフケアシステムは会員に健康ケアを提供する都市型コミュニティです。私は大学病院で老年内科を専攻後、在宅医療に携わるようになって 22 年になります。現在は東京都千代田区の在宅療養支援診療所、水道橋東口クリニック理事長・院長を兼任しております。

理事会においては、在宅ケアの現状について、とくに医療および医師の立場から発言させていただいております。在宅医療推進の政策と現場の状況のギャップなど在宅ケア実践の諸問題をお伝えしていくことが私の役割と考えております。個人的には、高齢者の看取りと保健医療福祉関連職のチームアプローチに強い関心をもっています。

また、広報委員会に所属しておりますので、委員長の河野あゆみ先生を補佐し、今後会員非会員を問わず、他関連学会との交流も含め、本学会の活動を積極的にお知らせしていこうと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。



長江 弘子
千葉大学大学院看護
学研究科

<理事就任にあたって：活気ある日本在宅ケア学会に！と願っています>

はじめまして、千葉大学のエンド・オブ・ライフケア看護学の長江弘子と申します。今年度、新米にもかかわらず会計と学会誌編集委員長を担当させていただくことになりました。責任は重いですが貴重な機会をいただいたことに感謝し本学会の発展のために貢献できるよう精いっぱい務めさせていただきます。

わが国の高齢多死時代を乗り越えていくためには、地域包括ケアを実現することが必要です。その実現には在宅ケアに携わる医師や看護師、介護士等の人材育成とその仕組み作りについて本腰を入れて取り組むべきと考えております。したがって、今後の学術集会や学会誌を通じてこれまで以上に会員の皆さまの実践に役立つ内容や情報を発信していくとともに、会員相互の交流を促進し、会員の実践知を共有化する場を作り、課題を明確にすることが重要だと思っております。

僭越ながら、第 18 回の学術集会長を務めさせていただきます。2014 年 3 月 15～16 日に東京「一橋講堂」のある学術総合センターで開催する予定で準備を進めております。学術集会では、多様なエンド・オブ・ライフを支える在宅ケアのあり方について多くの方々と課題を共有し、実践の手ごたえをつかめるような企画を考えてまいります。どうぞ、会員の皆さま、一緒に在宅ケアにかかわる友人、知人に声をかけてご参加くださいますよう、よろしくお願いいたします。



福島 道子
国際医療福祉大学保健
医療学部看護学科

このたび、本学会理事に就任いたしました。

この機に考えましたことのひとつに、本学会の「向かう先」があります。本学会は、医師、看護職、リハビリテーション職等、多くの職種で構成される学際的学会です。昨今は、チーム医療や職種間連携が強調され、他方、保健医療福祉関連の学会が細分化し多数立ち上がっています。このようなときだからこそ、本学会は学際性を特徴とする学会であることをより前面に出す必要があると思います。また、本学会はだれのための学会かという点も課題ではないかと思います。すなわち、研究者を主体とする学会なのか、あるいは、多くの実践者に入会してもらい、実学としての特徴を指向するのかということです。本学会の歴史を振り返ってみると、そのどちらも大切にしつつ、否定的な言い方をすれば曖昧なままにきたようにも思います。しかし、このことは本学会の存続にかかわる課題ではないでしょうか。私自身はまだ結論をもちませんが、理事会や学術集会で話し合ってみたい事柄です。

以上、会員の皆さまとともに、本学会のために力を尽くしてまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

◆監事◆



金川 克子
神戸市看護大学

監事に選出されました金川です。

本学会の発足当時はよく学術集会に出席しておりましたが、最近は出席の頻度が少なくなり、学会誌等を通じて学会の動きや学会員の活動にふれていました。

本学会の動向をうかがうなかで、発展性がやや少ないような感を受けておりましたが、多様な職種や当事者を含めてのチーム医療やアプローチの重要性が増すなかで、本学会の存在意義は今後大いに期待されるものと思います。

人々は一般的には、できれば住み慣れた地域や在宅で、病気と共生しながらも生活していきたいと願うものですが、その思いと実際との間には乖離があり、そのための条件整備や体制づくり、制度が必要であり、それに向けての理論やスキルの開発が重要と思います。

人の一生は変化に富んだものであり、思考過程にも変化があり、関心事にも多様性がみられます。

私ごとですが、在宅ケアに関する NPO を立ち上げており、そこを基盤に在宅ケアのありかたや、人々の在宅ケアへの期待やおもいを探ってみたいと思います。

監事の仕事は会計監査の仕事が中心ですが、学会のあり方や運営等に関し、理事の方々の活動ぶりを拝見させていただき役割もあるのではと思います。

本学会の発展と人々の健康と福祉の向上に貢献できるよう少しでも関与できればと思います。



佐藤 美穂子
公益財団法人日本訪問
看護財団

本学会の監事を引き受けました佐藤美穂子です。所属先は日本訪問看護財団で、2012年4月に公益財団法人として新たなスタートを切りました。訪問看護等在宅ケアを充実させるために、研修や訪問看護等の運営支援、研究助成、機関誌「ほうもん看護」の発行などを行います。直営の訪問看護ステーション3か所とサテライト1か所をフィールドとし、その運営を通して政策提言を行うなど訪問看護の拡充にお役に立ちたいと願っております。

本学会では、訪問看護に関連する診療報酬や介護報酬の改定のたびに、要望書作成にかかわり、本財団の調査研究の成果をもとに必要なデータを提供するなど重要な役割を担ってきました。新体制においては政策提言検討委員会委員を務めますので皆さまのご協力をお願いいたします。

さて、在宅ケアはチームケアですが、メンバーの1人である訪問看護師は約3万人（全看護職員の3%）しかいません。在宅ケアチームメンバーとしてワークするためには、まず、訪問看護の量的確保です。電子カルテに慣れているナースを惹きつけるために ICT 化を進めることもひとつでしょう。訪問看護師がモバイルを手にとり活躍する姿をイメージします。

2025年は目前です。必要なイノベーションに取り組み政策提言をしましょう。

◆委員会名簿◆

＜編集委員会＞

委員長：長江弘子（千葉大学大学院看護学研究科）

委員：岡田進一（大阪市立大学生活科学研究科），梶井文子（聖路加看護大学老年看護学），加瀬裕子（早稲田大学人間科学部），小西かおる（大阪大学大学院医学系研究科），下田信明（杏林大学保健学部），杉澤秀博（桜美林大学大学院老年学研究科），永田智子（東京大学大学院医学系研究科），原 礼子（慶應義塾大学看護医療学部），横山順一（日本体育大学社会福祉学研究室）

＜学会活動推進委員会＞

委員長：住居広士（県立広島大学人間福祉学科）

委員：黒田研二（副委員長／関西大学人間健康学部），麻原きよみ（聖路加看護学大学地域看護学），岡田進一（大阪市立大学生活科学研究科），小野ミツ（九州大学大学院医学研究院），加瀬裕子（早稲田大学人間科学部），下田信明（杏林大学保健学部），白澤政和（桜美林大学大学院老年学研究科），辻彼南雄（一般社団法人ライフケアシステム），原 礼子（慶應義塾大学看護医療学部）

＜広報委員会＞

委員長：河野あゆみ（大阪市立大学大学院看護学研究科）

委員：佐々木明子（東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科），辻彼南雄（一般社団法人ライフケアシステム）

＜渉外活動推進委員会＞

委員長：白澤政和（桜美林大学大学院老年学研究科）

委員：金川克子（神戸市看護大学）

＜倫理委員会＞

委員長：瀧澤利行（茨城大学教育学部）

委員：長江弘子（千葉大学大学院看護学研究科），福島道子（国際医療福祉大学保健医療学部看護学科）

＜政策提言検討委員会＞

委員長：黒田研二（関西大学人間健康学部）

委員：内田恵美子（株式会社日本在宅ケア教育研究所），佐藤美穂子（公益財団法人日本訪問看護財団），島内 節（広島化学学園大学看護学部），下田信明（杏林大学保健学部），瀧澤利行（茨城大学教育学部）

＜論文賞選考委員会＞

委員長：下田信明（杏林大学保健学部）

委員：亀井智子（聖路加看護大学老年看護学），加瀬裕子（早稲田大学人間科学部），長江弘子（千葉大学大学院看護学研究科）

■ 学会ホームページのご案内

この度、学会ホームページをリニューアルし、新たに論文検索システムの導入、および委員会情報等の更新をいたしました。近日中に英語版サイトも公開予定です。随時、さまざまなご案内を掲載いたしますので、ぜひご覧ください。

・日本在宅ケア学会ホームページ：<http://www.jahhc.com/>

■ 「日本在宅ケア学会誌」投稿論文の締切について

下記のとおり投稿締切を設けております。ご投稿をお待ち申し上げます。

- ・第17巻1号（2013年9月発行予定）：2013年2月末日
- ・第17巻2号（2014年2月発行予定）：2013年9月10日

■ 第18回日本在宅ケア学会学術集会について

次年度学術集会は、下記のとおり開催を予定しております。

- ・会 期：2014年3月15日（土）、16日（日）
- ・会 場：学術総合センター（東京都千代田区一ツ橋2-1-2）
- ・会 長：長江 弘子（千葉大学大学院看護学研究科）

第17回日本在宅ケア学会学術集会のご案内

テーマ：生きる力を高める在宅ケア

会 期：2013年3月9日（土）～10日（日）
会 場：茨城県立県民文化センター
〒310-0851 茨城県水戸市東久保 697 TEL 029-241-1166
会 長：瀧澤 利行（茨城大学教育学部）

<プログラム（予定）>

■第1日目 3月9日（土）

開会式・総会

フォーラム「高齢者虐待の今；法改正を受けて」

平成24年度日本在宅ケア学会公開講座

特別講演「おひとりさま時代のケア社会」

上野千鶴子（東京大学名誉教授／立命館大学大学院先端総合学術研究科特別招聘教授）

招待講演「今、考える西洋医学の歩みと課題」

多田羅浩三（大阪大学大学院医学部名誉教授）

教育講演1～4

懇親会（茨城県立近代美術館内レストラン「プティ・ポワル」）

■第2日目 3月10日（日）

シンポジウム「生きる力を高める在宅ケアの課題」

一般口演発表 等

<参加費・懇親会費について>

学会員：8,000円 非会員：9,000円

茨城県との共催にかかわる参加者（県内従事者・実践者）：2,000円

学 生：4,000円（学部生・大学院生）

懇親会費：4,000円

<事前参加申込について>

・期 間：2013年2月15日（金）まで

・方 法：下記郵便振替口座に、参加費をお振込ください。

〔加入者名〕第17回日本在宅ケア学会大会事務局

〔口座番号〕00170-9-489056

<お問い合わせ>

第17回日本在宅ケア学会学術集会事務局

〒310-8512 茨城県水戸市文京 2-1-1 茨城大学教育学部公衆衛生学研究室

TEL・FAX：029-228-8323